

## アフリカからの便り 3

久しぶりに〈アフリカからの便り〉です。3回目は南アフリカから、今回は、本校の卒業生(26期生)で、COVID-19 感染症の拡大感染がやや収まっていた今年の2月から南アフリカ共和国に留学している谷野 理星さんについて紹介しましょう。

谷野さんは、今春、国際基督教大学を卒業し、現在は University of Cape Town の大学院修士課程 Master of Arts by coursework and dissertation で文化人類学を学んでいます。本校在学中はダンスドリル部員として世界大会にも出場したメンバーの一人で、大学卒業論文として南アフリカにおけるスラムでのダンス活動に焦点を当て、実際にボランティア活動の一環として現地の子ども達にダンスの指導をした実績の持ち主です。この経験をもとにアフリカ伝統舞踊の実践的研究をテーマに取り組んでいます。

WHO 資料や新聞報道によれば、南アフリカにおける COVID-19 感染拡大状況は、人口 10 万人当たりの新規感染者で言えば日本より少なく都市部での衛生環境はまずまずと言えるでしょう。しかし、何と云っても長年のアパルトヘイト政策の後遺症による貧富の格差は激しく、都市内部には数カ所のスラムが存在しています。彼女からメッセージによれば、研究目的は「ギャングへの参加を含む若者の非行が蔓延しているスラムで、いかに伝統舞踊の実践が子ども達を内面から変え、治安・貧困問題の根本的な解決に繋がるかを解明する」ということです。具体的には、「これまで人類学的に焦点があまり当てられてこなかった『伝統舞踊の実践』について、平和構築のツールとしての可能性を見出し、より多くの子どもたちに届けることで個人の内面の成長とコミュニケーションの開発に繋げる」こととしています。このように、彼女の研究はアカデミアの枠に留まらず、スラムの子ども達が自立できるような社会的支援や教育を行うというワクワクするような内容です。現在、指導教官と定点観察できる対象地の選定を行っており、準備ができ次第、人類学的なフィールドワークに取り組む計画だそうです。

谷野さんの将来の夢は、ユネスコの「無形文化遺産」と「芸術教育」という2つのセクターを橋渡しする新しいプロジェクトに参画したいということだそうです。近年、アフリカの人類学研究では日本人の若手研究者(特に女性)の活躍がめざましいだけに、谷野さんもその一員となってほしいと願い、応援しています。

校長 石飛 一吉



Fig.1 University of Cape Townの広大なキャンパス



Fig.2 誰かの応接間のような大学のゼミ室  
(左が谷野さん)